

スピーチロックを学んだ後のスタッフの意識と対応の変化

認知症治療病棟の現状と意識調査からみえたもの

医療法人社団愛陽会 三川病院

Key Words

スピーチロック 認知症

はじめに

スピーチロックとは、言葉によって身体的、または精神的な行動を抑制することであり、具体的には「動かないで」「立ったらダメ」「ちょっと待って」などの言葉かけである。

今回、認知症治療病棟で働くスタッフの何気なく使っている言葉かけがスピーチロックに当たるのではないかと感じた為、スピーチロックとその弊害について知識を深めることで、スピーチロックのない対応につながると考え、本研究に取り組むこととした。

I. 研究目的

スピーチロックについて学習後、スタッフの意識と対応に変化があるかを明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

実態調査研究

2. 研究対象者

A病院認知症治療病棟に勤務するスタッフ24名

3. データ収集期間

2023年12月から2024年2月

4. データ収集方法

研究前にスピーチロックについての認識調査を聞き取りにて行った。「スピーチロックという言葉を知っているか」を聞き、「知っている」と回答した対象者に対しては、「言葉の意味を知っているか」と聞いた。その後、スピーチロックの説明文と認知症患者に与える弊害についての資料を作成し、スタッフに配布した。1週間精読してもらった後、計3回のアンケートを実施した。

1回目のアンケートの質問内容は、1)スピーチロックに該当する言葉を使ったことがあるか、2)それはどのような時か、3)スピーチロックを無くすことは出来るか、とし、3)に対しては「出来る」「出来るかも」「難しい」「出来ない」から選択し、「難しい」「出来ない」の理由も聞いた。

2週間後、2回目のアンケートを実施した。1回目のアンケートから得られたスピーチロックに該当する言葉を、自由記述方式で該当しない言葉へ言い換えてもらった。その結果をスタッフへ提示し、言い換え実践期間を設けた。啓蒙活動としてポスターを作成し可視化する対策を行った。

さらに2週間後、3回目のアンケートを実施した。言い換えを実践した感想を自由記述とし、「スピーチロックを無くすことは出来るか」の質問に対しては1回目のアンケートと同様の選択肢を設定し聞いた。

5. データの分析方法

アンケートの質問への回答人数は単純集計した。自由記述の回答は類似性のある記述ごとに分類した。言い換え実践後の感想は、スタッフの対応や意識に変化があったと判断した内容を抽出した。

III. 倫理的配慮

本研究はA病院の倫理委員会の許可を得て実施した。研究の趣旨、目的、方法を理解した上で匿名での自由参加とした。なお、本論文について発表者らに開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

IV. 結果

スピーチロックについての認識調査では、「知らない」と回答した人数は15名、「言葉は知っているが意味は知らない」は2名であった。

1回目のアンケートでは、23名が「スピーチロックをしたことがある」と回答した。スピーチロックに該当する言葉として多く回答されたのは、①トイレ要求を繰り返す患者に『ちょっと待って』と言う対応をしている、②他患の安全ベルトを外そうとしている患者に『余計なことしないで』と叱責する、③食事を待っている間に椅子から立ち上がろうとする患者に理由も聞かず『じっとして』『立たないで』『座って』と止める、の3つの場面で、いずれも繰り返される患者の行動に対するものであった。「スピーチロックを無くすこと

は出来るか」という問いへの回答は、「出来る」2名、「出来るかも」14名、「難しい」8名、「出来ない」0名であった。難しい理由として、「日常の介助の中で無意識に使われている」、「スピーチロックと認識していても、同じことを何度も言われると余裕がなくなり言葉がきつくなる」「患者の転倒や転落などの緊急性が高い場合や、見守りのスタッフが少なく、同時に複数の患者が突発的に動き出した時など『ダメ』『やめて』『行かないで』と言ってしまう」という回答があった。

2回目のアンケートで言い換えた言葉かけの記述では、①に対し『〇時にトイレに行ったので、次は△時に行きましょう』『順番で行きますね』②に対し『転んでけがをしてしまうので、外さないでくださいね』『ありがとう、私がするから大丈夫ですよ』③に対し『どうしましたか？何か用事ですか？』『もう少しで食事がくるので、それまで座って待っていきましょう』等の回答があった。突発的な行動に対する回答はなかった。

3回目のアンケートの実践した感想では、「患者が何を求めているのか等、言葉の裏にある意味を考えて接するようになった」、「頭ごなしに『ダメです』『座って下さい』と言わないようになった」、「患者自身に『そうか、分かった』と納得してもらえる頻度が増えた」、「取り組む前より自分のイライラが少なくなった」、「関係性も良くなった」、「言葉の使い方次第で患者の反応が変わると感じた」、「他のスタッフのスピーチロックにあたる言葉かけが気になるようになった」、との回答があった。スピーチロックを無くすことが出来るかについての回答は、「出来る」4名、「出来るかも」15名、「難しい」5名、「出来ない」0名であり、学習前後で大きな差はみられなかった。

V. 考察

本研究では、スピーチロックについて学習した結果、スタッフのスピーチロックではない言葉に言い換えようとする意識が高まり、患者に対して優しい対応へと変化したことが明らかになった。

最初の聞き取りで、15名が「スピーチロックを知らない」と回答し1回目のアンケートで23名が「スピーチロックをしたことがある」と回答した。この結果から、大多数のスタッフがスピーチロックに対する知識がなく、繰り返される患者の行動に対し無意識に使用していたことが示された。檜木は、「介護者に悪意がなく意識せずに発する言葉により利用者が行動を制限され、その場にいる人が不快な感情を抱く」¹⁾と指摘している。余裕がなく強くなりがちなスタッフの言葉かけは、認

知機能が低下している患者には伝わらず行動を制限すると同時に患者を不快にさせ、結果としてスタッフ自身もイライラしていた可能性がある。

3回目のアンケートからは、「取り組む前より自分のイライラが少なくなった」、「関係性も良くなった」と、スタッフは言葉の使い方で患者の反応が変わることを実感していた。佐藤は、「認知症の人への接し方や言い方が重要であり、認知症の人は相手が発する雰囲気はしっかりとキャッチしている」²⁾と述べている。今回、スピーチロックにならない優しい言葉かけを意識し対応したことで、患者との関係性が良好なものとなりスタッフ自身のイライラの軽減につながったことが示唆された。

おわりに

本研究では、研究対象が1つの病棟であり一般化は出来ないが、スタッフ自身がスピーチロックを認識し患者と向き合う姿勢を再確認したことは大きな意義があったと考える。

マンパワー不足の時など転倒や転落などの事故を防ぐ為に咄嗟的にスピーチロックしてしまう課題については今後も継続して検討していきたい。

引用・参考文献

- 1) 檜木博之:虐待になっていませんか？あなたの言葉遣い, 高齢者安心・安全ケア, 15(4), p 83-87, 2012
- 2) 佐藤眞一:認知症心理学の専門家が教える認知症の人にラクに伝わる言いかけフレーズ, 第1版, ディスカバー・トゥエンティワン, p 6, 2023
- 3) 橋爪由花:ユマニチュードの技術を取り入れた効果—暴力行為のある認知症患者との関わり, 日本精神科看護学会誌 61(1), p 436-437, 2018
- 4) 清水径子:言葉による抑制に関する介護老人福祉施設職員の認識と実態. 日本認知症ケア学会誌, 第15巻3号, p 624-633, 2016
- 5) スピーチロックの廃止に向けて, 医療法人いつき会いつきの里, 高齢者安心・安全ケア, 14, (2) p 31-39, 2012